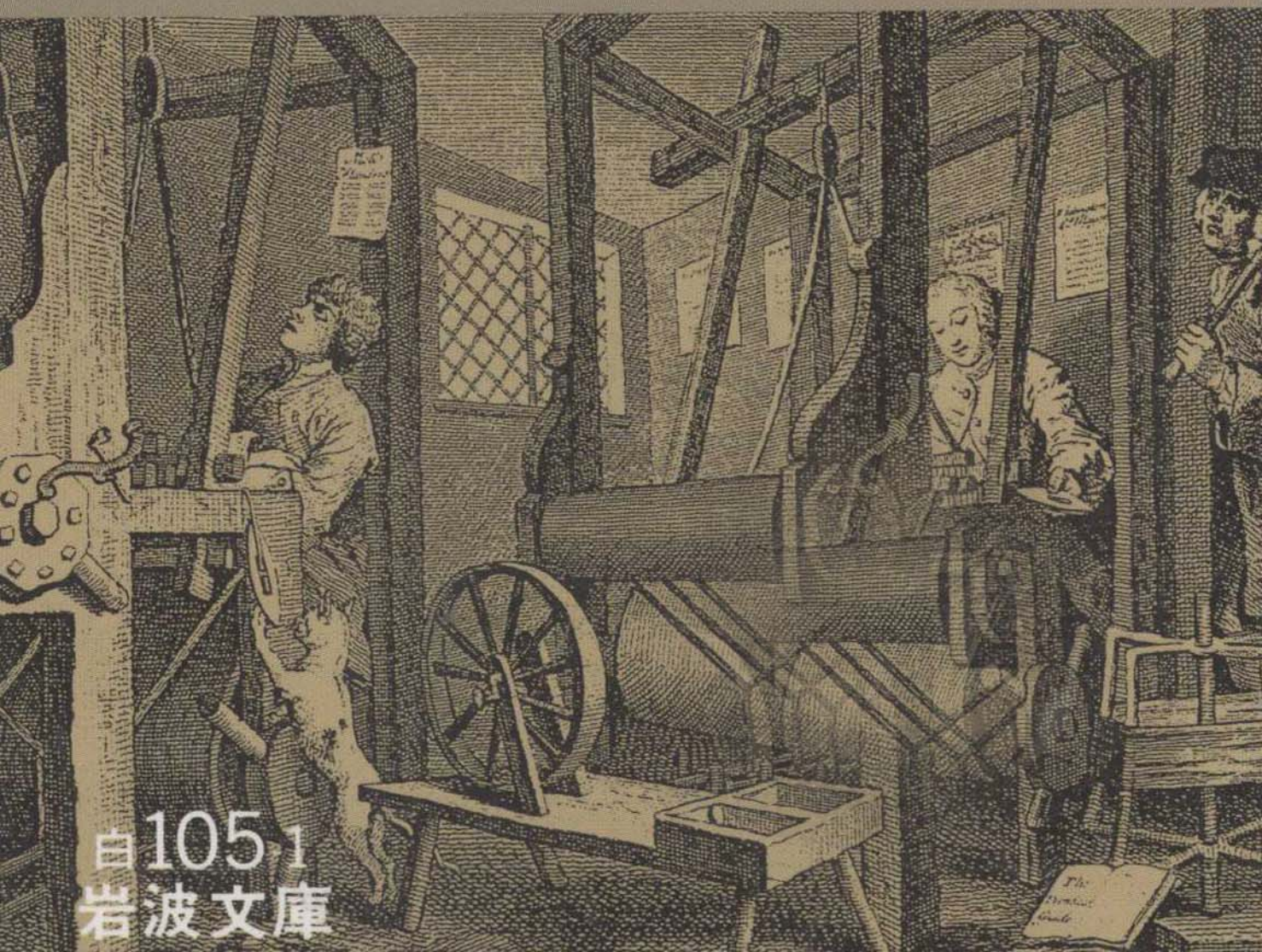


諸国民の富

(一)

アダム・スミス著

大内兵衛・松川七郎訳



白105.1
岩波文庫

しよこくみん とみ
諸国民の富 (一) [全5冊]
アダム・スミス著

定価はカバーに表示してあります

1959年6月25日 第1刷発行
1995年6月15日 第44刷発行

訳者 おおうちひようえ まつかわしちろう
大内兵衛 松川七郎

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051

印刷・精興社 製本・田中製本

ISBN 4-00-341051-3

Printed in Japan

岩 波 文 庫

34-105-1

諸 国 民 の 富

岩 波 書 店

AN INQUIRY INTO THE NATURE AND
CAUSES OF THE WEALTH OF NATIONS

by

ADAM SMITH

Edited, with an introduction, notes, marginal
summary and an enlarged index by Edwin
Cannan. 6th edition. London, 1950. 2 vols.

訳者はしがき

岩波文庫の旧版『国富論』の第一分冊は一九四〇年九月に出た。そしてその最終の第五分冊が出たのは一九四四年十一月であった。この邦訳本が在来の訳本に比してとくにすぐれているというほどの自信もなかったが、あれからほぼ十五年、この訳書はかなり多数の読者をもった。これは、戦後、経済学の研究学習が急にさかんになって、スミスの意義が認められたからであるが、この訳書が岩波文庫本であったということにもよったのであろう。

そのうちに、この文庫の紙型もすり切れたし、訳文もふるくさくなったし、かなづかいも旧式となったしするので、これを訳し直すことが、私の義務であるように思っていた。そのことを岩波書店もつよく希望した。しかし私は多忙であったので、私の友人の松川七郎君を訳者として岩波書店に推し、その訳を一任しようとした。同君は、私と共同ならということ、それを引きうけてくれ、相当の苦心を払って訳業をすすめた。

約束では、松川君の訳稿に私が朱筆をいれるはずであったが、それをよんで見て、その余地がないことを知った。それで、この訳業はすべて同君の仕事である。ただ、これまでの因縁もあり、書店の希望もあって、共訳者として私の名はもらうことにした。

旧訳も「キャンナン版」を土台にしたものであったが、キャンナン教授の「序」や「編者の序論」

や脚注の一部は採録していなかった。しかしこれらは、現在では古典的な価値をもつものであり、原著各版の相違、原著の由来、原著者の思想の系譜などを明らかにするうえに、すくなくらず読者の参考になるものと考え、こんどの訳にはそのすべてを収めた。

旧訳では書名の略称を『国富論』としておいたが、こんどこれを『諸国民の富』に改めた。これについてはわれわれと書店との間でいろいろ議論をして見たが、いまは日本の学界ではあとの方が通用力をもっているであろうと思い、それに従うことにしたのである。

旧訳もそうであったが、新訳もまた在来の邦訳書のおかげを蒙ったことが多い。また、今回の訳業に当って、松川君はとくに一橋大学の諸先輩や同僚諸君の教示をうけたことが多い。この二つのことに對して、ここに改めて感謝の意を表したい。

旧訳の序文の終に私は次のように書いた、「アダム・スミスの『国富論』は近代経済学の礎石であり、最も古典らしき古典である。私はこの意味において敬虔なる心持をもつてこの訳業に従事したのであるが、残念ながら所期の成果を挙げ得たとは思はない。不備の点について読者諸君の叱正を戴きたい」と。松川君の訳について私は安心してゐるが、同君としてもこの意味のことは残しておきたいであろう。

一九五九年（昭和三十四年）四月

東京にて 大内兵衛

凡 例

(1) 本訳書は

An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations by Adam Smith.
Edited, with an introduction, notes, marginal summary and an enlarged index by Edwin Cannan, M.A., LL. D., professor of political economy in the University of London. 6th edition. London, 1950. 2 vols.

の旧訳——これとまったく同一内容の「キャナン版」(二巻本)の第五版(一九三〇年)を台本にした旧訳——を土台にした改訳である。そしてこれを機会に、編集者キャナン教授の「序」と「編者の序論」と、旧訳では省略されていた脚注のすべてとが新たに訳出されたから、本訳書は「キャナン版」(二巻本)の全訳ということになる。

(2) この改訳を機会に、訳書名を『諸国民の富』にあらためた。原書名 'An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations' の邦訳書名としての『国富論』は、一九二六年以来のものである。すなわち、それは石川暎作氏訳『富国論』(一八八四—一八八八年 第三巻は嵯峨正作氏訳)が気賀勘重博士訳『国富論』(上巻 一九二六年 経済学古典叢書)によってあらためられて以来のものなのであって、その後三十余年、伝統的な親しみももたれている。けれど

も、この原書名の邦訳書名としては、『諸国民の富』のほうがいっそう適切であり、自然でもあると考えられるし、またわが国の学界でも、このほうが比較的広く用いられるようになってきたと判断されるので、このようにあらためたのである。

- (3) 改訳のさいに訳者が主として参照したのは、原著についてはその初版(一七七六年)およびこの「キャナン版」(二巻本)の台本になった第五版(一七八九年)、公刊邦訳書としては前記の石川暎作氏訳(一八八四―八八年)・竹内謙二博士訳(改訂版 一九四九年 改造選書)・氣賀勘重博士訳(上巻 一九二七年 岩波文庫)・青野季吉氏訳(一九三三年 春秋文庫)の全部、外国語訳としてはガルヴェ＝ド＝リール(Ch. Garve=A. Dörrien)両氏共訳の独訳書(第三版 一八一〇年)・シュティルナー(M. Stinner)氏訳の独訳書(一九二四年)である。

- (4) 本文のバラグラフのはじめに「」にいて組みこまれている部分は、キャナン教授の「欄外の摘要」(marginal summary)であって、それについては同教授の「序」を参照ねがいたい。

- (5) 原文のなかの大文字組みおよびイタリックは、それらが強意のためのものと判断されるばあいにかぎってゴジックにした。

- (6) 人名・地名その他若干の固有名詞をかたかなで表現するばあいには、原文に示されているつづりを尊重しながら、原則として英語読みに表現した(たとえば、「Pity」という人名があれば、「プリニ」とし、「プリニウス」とはしなかった)。そしてこれらの固有名詞は、本文・注をつうじてはじめてでてくるばあいにかぎって原名を示すのを原則とした。

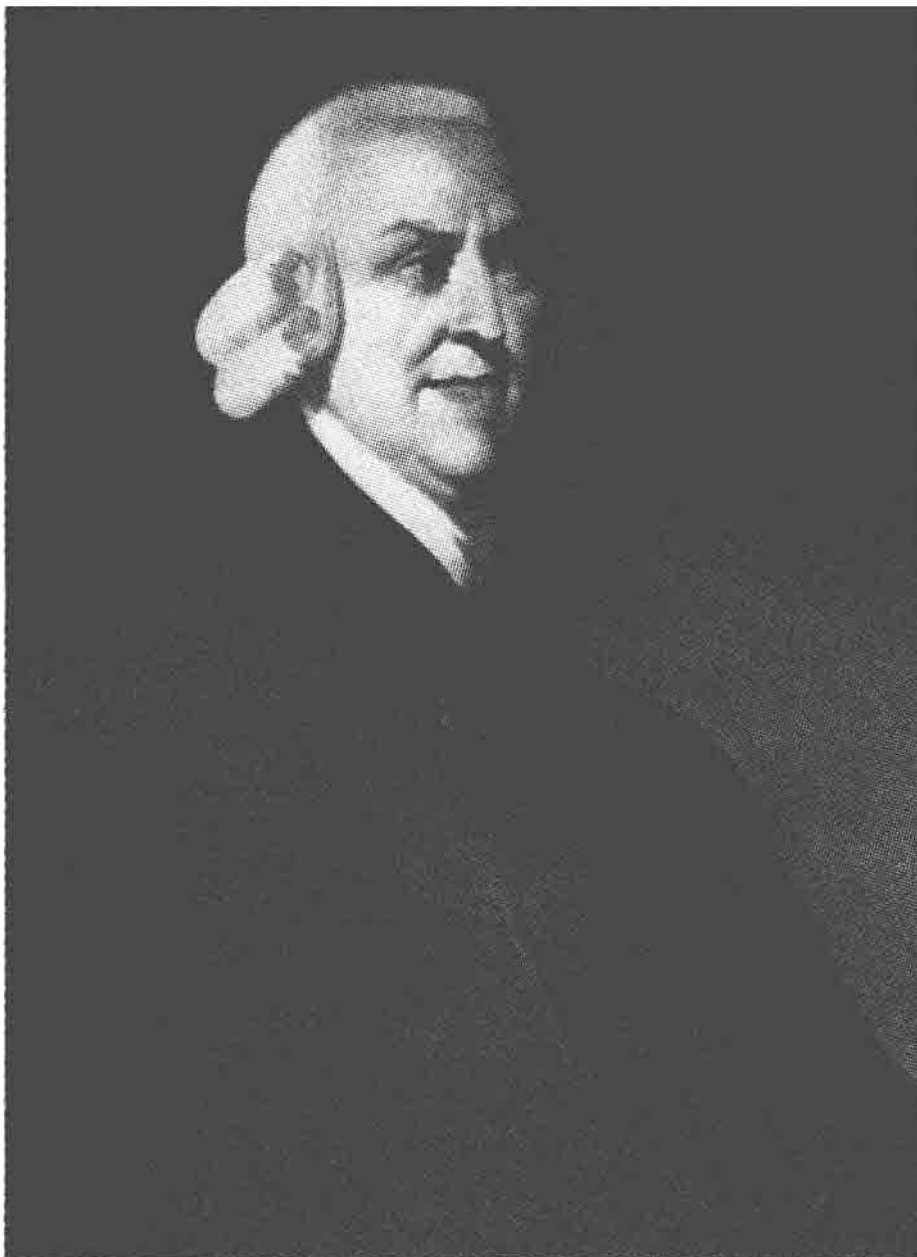
- (7) 「キャナン版」(二巻本)の脚注の性質についてはキャナン教授の「序」を参照ねがいたい。

この脚注には、原著者の注と編者のそれとがある。本訳書では、前者は原著の第五版の記号にしたがって*印で示し、後者はアラビア数字で示して「」にいった。なお、訳者が便宜上おぎなった箇所は、本文・注をつうじてへにいて他と区別した。脚注は、本訳書ではすべてそれぞれのパラグラフのすぐあとにまとめて組みこまれている。

- (8) 本文の下部の欄外にある数字は「キャンナン版」(二巻本)のページ数を示している。また「編者の序論」や全編の注のなかで、「第一巻」・「第二巻」・「前出」・「後出」として指示されている日本数字は、すべて「キャンナン版」(二巻本)の巻数およびページ数である。ついであるが、「キャンナン版」(二巻本)のページ数は、その第一巻(第四編第三章まで)に関するかぎり、一巻本の「キャンナン版」——いわゆる「モダン・ライブラリ(Modern Library)版」——のページ数にほぼ照応している。

- (9) 引用書の邦訳は、訳者が主として利用したものをかかげたが、引用文そのものは、必ずしもその邦訳どおりにはしていない。邦訳者諸氏のご寛恕をあらかじめおきたいと思う。

- (10) 次頁にかかげた原著者の肖像は、The Vanderblue memorial collection of Smithiana, Boston, 1939 に収められているのを縮写したものである。



アダム・スミス (1723—1790)

目 次

訳者はしがき	三
凡 例	五
序（エドウィン・キャナン）	二
編者の序論（エドウィン・キャナン）	一
第三版へのはしがき（一七八四年）	七
第四版へのはしがき（一七八六年）	八
諸国民の富の性質および諸原因に関する一研究	
序論および本書の構想	九
第一編 労働の生産諸力における改善の諸原因について、また、その生産物が人民のさまざまな階級のあいだに自然に分配される秩序について	七
第一章 分業について	七

第二章	分業をひきおこす原理について	二六
第三章	分業は市場の広さによって制限されるということ	二四
第四章	貨幣の起源および使用について	一三
第五章	諸商品の実質価格および名目価格について、すなわち、それらの労働価格および貨幣価格について	一五〇
第六章	諸商品の価格の構成部分について	一八五
第七章	諸商品の自然価格および市場価格について	二〇一
第八章	労働の賃銀について	二二九
第九章	資財の利潤について	二六六
第十章	労働および資財のさまざまな用途における賃銀および利潤について	二九〇
第一節	職業そのものの性質から生じる不平等	二九二
第二節	ヨーロッパの政策によってひきおこされる不平等	三三〇

序

この版の本文は、第五版、つまりアダム・スミスが死ぬまえに公刊された最後の版の本文を写したものである。第五版は初版と綿密に校合され、両者の不一致の箇所が発見され、い、その変更の来歴は両者の中間にある諸版をつうじてあとづけられた。この校合の結果は、たとえば‘these’が‘those’に変わったり、‘towards’が‘toward’に変わったり、また‘conveniences’がたまたま‘conveniencies’でおきかえられたりしているような、まったく無意味な数個のばあいとは別として、すべて脚注に記録しておいたが、諸版の相違でも、たとえば‘it’が‘is’になっていたり、‘than’が‘that’になっていたり、‘because’が‘becase’になっていたりするような、きわめて自明な、疑う余地のない誤植にもとづくものはこのかぎりではない。たとえ疑う余地のない誤植でも、よくあるように、それがもっともらしく読みちがえられたまま現代版の本文中に写されていたり、あるいはそれがなにか他の興味ある特徴を示したりしているばあいには記録しておいた。

十八世紀の古典に二十世紀の衣装を着せてしまうのは好ましいこととも思われないので、わたしは第五版のつづりをそのままにしておき、それ自体矛盾のないものにしようなどとはけっして企てなかった。こうすることによっておちいるであろう危険は、‘Cromwel’の例

で示すことができよう。現代のたいていの読者なら、ちゅうちょすることなくこれは誤植だと非難するであろうが、実をいえば、このつづりは、ヒューム(Hume)がその『ヘイングランド史』(History)のなかで好んで用い、アダム・スミスが疑いもなくヒュームからとりいれたものである、といっても、この人名がでてくる二箇所うちの第二の箇所は、印刷者の見落しかそれとも片意地かのために、第四版までふつうどおり、'Cromwell'のままになっているのである。大文字やイタリックの用法の問題についても、わたしは以上と同じ厳格さで原著にしたがったが、このばあい、現代的な様式を尊重して、パラグラフの冒頭の語を大文字で組まずに小文字で組み、各章の表題をイタリックにしないで大文字で印刷し、さらに、'Chap.'と略記されているのを、'Chapter'におきかえたのがその例外である。また、新しい章をそのまえの章の末尾にすぐつづけてはじめるという古い慣習は、本書を参照しようとする研究者にとっては不便であるから、わたしは各章を新規のページでおこすようにした。原著の見ひらきの上部欄外にある 'The Nature and Causes of the Wealth of Nations' という無用な表題は、各章ごとの表題ととりかえられ、またそれが可能なばあいには、各章内における形式上の小区分ごとの表題ととりかえられているから、いくつもの小区分があるながい章の中間で本書をひらいたばあいでも、読者にはそこがどこであるかがすぐわかるであろう。こういう表題をつくることは、必ずしもつねにたやすくはなかったものであって、わたしは、批評家諸君がそのどれかを非難しようとするばあい、利用可能なスペースがわずかしかなかった、ということを考えてほしいと思う。

原著の欄外の編・章を示す数字は、(その章が番号のついた節に分れているばあいには)各章内の節を示すためにどうしても必要な数字を追加したうえで、各ページの上部に移されているのであって、これは本文の摘要を欄外に書きこむ余地をつくるためである。この摘要を書きながら、わたしは、ある古代の傑作のそばに新建築をするのを委任された建築家のような感じがした、つまりわたしは、一方ではスミスのことばや文体を見当はずれにとりいれることを避けながら、他方では原文と不快な対照になるおそれのある目ざわりな現代語法を避けるように努力したのである。

原著の索引は、印刷技術上やむをえぬごくわずかの変更を加えたうえで、第三版・第四版および第五版どおり翻刻したのであって、そのさいわたしは、これに多数の新項目や参照項目を追加し、それらを角括弧にいれておいた。これらの項目をつけ加えるばあい、わたしは、地名および人名に関しては絶対完全なものにしようと努力したが、国王その他の人名が単に年次を示すために用いられているばあいには、これらをふくめるのは無用と思われるし、また「アジア」(Asia)、「イングランド」(England)、「大ブリテン」(Great Britain)および「ヨーロッパ」(Europe)は、いくら包括的にとりあつかおうとしても総じて徒労としか思われないので、いずれも例外とした。わたしは、「見えない手」(Invisible hand)、「つばやなべ」(Pots and pans)、「報復」(Retaliation)、「商人国民」(Shopkeepers, nation of)というような、とりわけ注目すべき章句を復元する助けになりうる少数の見だし語をいれておいた。しかし、わたしは、原著の索引のなかにある「商業」(Commerce)とか「労働」(Labour)と

かというような比較的一般的な項目には、これ以上の追加をするのを好ましいとは考えなかった、というのも、これをはじめたら最後、この書物のなかのほとんどすべての事項にまでそれを拡大しなければおさまりがつかなくなるであろうからである。本文または著者の注のいずれかに明示されている典拠は索引にいれたが、編者の注についての参考書までもこれに加えると不便なうえに混乱を生じるおそれもあるので、わたしは、本文・著者の注および編者の注のなかであげられているすべての典拠を別に一括して「索引 II 出典」とし、これを付録にした。わたしは、これが経済学史の研究者諸君に有用なものになることを希望している。

著者が自分で脚注をつけているばあいには、たとえその指示されている位置が少々おかしく思われるばあいがしばしばあっても、正確にそのとおりにし、脚注それ自体は第五版どおり正確に印刷した。スミスの注についての編者の注や追記は、角括弧にいれておいた。おそらく批評家諸君は、諸版の校合の結果を記録した注のなかの多くのものがその性質上つまらない、と苦情をいうであろうが、わたしは、もしわたしがすべての相違を記録しておかなかったなら、読者諸君は、記録されていない相違はなんの重要性もない、というわたしの見解をうのみにしてしまわなければならないであろう、ということを指摘しておきたい。多大の労苦のおかげで証拠がためられたのであるから、それを記録しておくのがそうしないのにまさるのとはもとよりであるし、そのうえ、ささいな注は数多いにしても、かりにそれらをひとまとめにしたところで、本書の三、四ページを占めるにすぎないであろうから、なおさら

そうである。そればかりではなく、「編者の序論」で見られるように、もっともささいな相違でも、スミスが自著をどのように考え、またそれをどのようにとりあつたかについて、興味ふかい事実が明らかになることがしばしばあるのである。

その他の注は、主としてアダム・スミスの知識の源泉に関するものである。かれが引用書名を記しているばあいにはふつうなんの困難も生じない。さもないところではこの問題についてのこまかい疑問がしばしばおこる。ボナ博士(Dr. Bonar)の『アダム・スミス蔵書目録』(*Catalogue of the Library of Adam Smith*)が一八九四年に、またアダム・スミスの『講義』(*Lectures*)が一八九六年に公刊されたおかげで、もろもろの典拠についての調査はいちじるしく楽になった。『目録』は、スミスが『諸国民の富』の公刊後十四年、つまりその死にさいしてどのような書物をもっていたか、ということとをわれわれに語ってくれるし、また『講義』のほうは、ある特定の知識は一七六三年以前に公刊された書物からえられたにちがいない、とわれわれがしばしば主張しうる根拠をなしているのである。周知のように、スミスは弁護士図書館を利用したのであるから、一七七六年に印刷されたこの図書館の目録の第二部も、ある程度役だつ。いうまでもなく、綿密に語句を比較してみると、ある特定の立言はある特定の源泉に由来しているにちがいない、ということがしばしば確実になる。それにもかかわらず、既知の参考書の多くのものは、単に知識や靈感のありうべき源泉を指示するにすぎないものと考えられなければならないのである。わたしは、スミスがそれを読むことが不可能かまたはありそうにも思えないばあいには、類似章句を引用したり、またはそれを指示した